

台北市北部・大直と護国神社の歴史

片倉 佳史

台北の歴史を誌上でたどってみよう。今や人口260万を数える大都市に発展しているこの町だが、その基礎は日本統治時代の半世紀の間に築かれている。今回は台北市北部の内湖と東部の松山の両地区の歩みを紹介してみたい。

「大直」の地名に刻まれた歴史

台北市の北部に位置する内湖区は近代的な高層ビルが林立する新興開発エリアである。MRT(都市交通システム)木柵線の順延開業によって居住環境は向上し、今や、信義区と並んで、台北で最も人気の高い住宅エリアとなっている。地価の上昇率などの統計でも毎年必ず上位に名を連ねる地域である。

地図を開いてみると、台北盆地の北側には基隆河が流れている。内湖地区はその北岸に位置しており、背後には深い緑に覆われた山並みが迫っている。ここに「大直」という地名が確認できる。まずはこの地名に隠された秘話から紹介してみたい。

ここは広い河岸が緑地として整備されており、市民の憩いの場となっている。サイクリングロードも整備され、早朝や夕方などは身体を動かしてやってくる人々でちょっとした賑わいを見せる。さらに、毎年、端午節に行なわれるドラゴンボートレースの会場になっていることもあり、「大直」という地名はそれなりの知名度を得ている。

この土地は、古くはケタガラン族の人々が暮らしていた。その後、16世紀頃から台湾南部に漢人系住民の移入が始まり、平地原住民との混血が進

んだ。オランダ統治時代、そして、鄭氏政権時代を経て、清国統治時代には出身地を異とする集団による勢力争いが頻発するようになる。これは「分類械闘」と呼ばれ、族群(エスニック・グループ)による衝突と戦乱が繰り返された。ケタガラン族の人々はこの時期に同化が進み、アイデンティティを失ったとされている。

「大直」という地名をさかのぼってみると、これは地形に由来していることがわかる。1684年に編纂された「清康熙台湾全島預覽図」の中にはすでに大直の名が記されている。基隆河は常に曲がりくねった状態で流れているが、この辺りを流れる時だけは一直線となって、河幅が広がる。これが「大直」の由来である。つまり、「まっすぐに、かつ太い」という河流の状態から大直の地名は生



基隆河の河畔はちょっとした公園のようになっている。毎年端午節にはドラゴンボートレースが開催され、多くの人々にぎわう。



ドラゴンボートレースの練習風景。今や外国人チームも参加する大きなイベントとなっている。5月・6月の風物詩である。

まれたのである。日本統治時代には「だいちよく」と呼ばれていた。

なお、本連載でも述べてきたように、日本統治時代、台北市北部には複数の神社が設けられていた。剣潭山の山麓、現在は圓山大飯店が建っている場所には台湾神社が鎮座しており、その東の脇には台湾神宮が鎮座式を待っていた（挙行前に焼失）。そして、後述するが、現在、観光客が多く訪れている忠烈祠は護国神社があった場所である。つまり、大直地区には三社の神社が基隆河を挟んで市街地に対峙していたのである。

台湾にもあった護国神社

日本統治下の台湾には数多くの神社が存在したが、その中で、護国神社は台北だけに一社が設けられていた。護国神社は戦中期に誕生したもので、1939（昭和14）年にその制度が定められている。各地に点在していた招魂社をまとめ、一本化することを目的としていた。言うまでもなく、これは戦時体制下、国威発揚を目的としており、国情に合わせて誕生した新しいタイプの神社だった。

台湾の護国神社は昭和15年7月18日に出された台湾総督府告示第284号で創建が決まり、関連施設が起工された。敷地は先述した台北市大直が選ばれた。これは台湾神社の東隣りに位置し、「昭和の大造営」と呼ばれた計画の一環だった。

この神社の神苑のモデルとなったのは明治神宮と樞原神宮だったという。本殿は流造りとされた。祭神となったのは靖国神社の祭神で、これに加え、「台湾にゆかりのある殉国者」が合祀されていた。その数は9226柱にもものぼっていた。

1941（昭和16）年1月15日には地鎮祭が挙行されている。そして、翌年5月23日に鎮座式が盛大に行なわれている。この5月23日は終戦まで、毎年の例祭日とされていた。

護国神社の特色として挙げられるのは、例祭のみならず、定期的に祭神を追加登録していく「合祀祭」が実施されていたことであろう。これはほかの神社では見られないもので、規模も大きかったという。

護国神社の創建により、各地に設けられていた招魂碑や招魂社は靖国神社の下、護国神社の名称



忠烈祠は中華民国のために命を投げ出した英霊を祀る空間である。また、鄭成功が祀られているほか、霧社事件の犠牲者となったモーナ・ルダオ、花岡一郎、花岡次郎、西来庵事件の首謀者・余清芳など、抗日義士たちも祭神とされている。



護国神社は台湾では一社のみが設けられていた。しかし、神社としての運命は短かく、記録はもちろんのこと、古写真を探すことも難しい（高橋正己氏収蔵）。



日本統治時代に発行された絵葉書の様子（高橋正己氏収蔵）。

で収められることとなった。このほか、慰霊祭、戦勝祈願式、そして、各種報告会なども護国神社を会場に行なわれることが多かった。そういった意味では、神社ではありながらも、催し物やイベントが数多く開かれた異色の空間といえる存在だった。

台湾護国神社は正面に拝殿、祝詞殿、本殿があった。これに加え、両側に参列舎（翼舎）が設けられていた。これは全国の護国神社に関していえば、ほぼ共通して見られるものである。しかし、従来の神社には見られないもので、護国神社特有のものであった。

また、広場そのものが際立って大きかったことも特筆されよう。これは祭典や式典時の参列者が

非常に多かったためで、軍・官の要人や遺族の代表者は左右翼部に設けられた参列席に着席し、順に拝殿へと向かった。遺族や兵士たちは広場でこれを見守った。現在の忠烈祠を訪れると、社殿の前に広大な前庭があるが、これは神社時代の広場が受け継がれたものである。

護国神社の跡地を訪ねる

台湾護国神社は鎮座からわずか3年あまりで終戦を迎え、廃せられている。日本は台湾の領有権を放棄し、その後、中華民国国民党政府が進駐を果たす。日本人は本人の意思にかかわらず、引き揚げを強要され、神社施設の管理も行なわれなくなった。遺棄される形となった各地の神社は国民党政府の排日政策もあって破壊、撤去の憂き目に遭い、痛々しい姿を晒すことになった。

台湾の統治者として君臨した国民党政府は日本が残していったものを敵性遺産として接收していったが、護国神社もその例に漏れなかった。そして、当時、中華民国行政院長の地位にあった蔣経国が中華民国軍人の英霊を祀る忠烈祠をこの地に設けるよう、指示を下す。完成は1969年3月25日であった。

敷地には北京の紫禁城内の大和殿を模した建物が社殿として造営された。蒋介石はここに「国民革命忠烈祠」と揮毫した。そのため、当時の名称はこれに合わせられたが、通称としては圓山忠烈祠、もしくは大直忠烈祠、台北忠烈祠と呼ばれていた。祀られているのは主に抗日戦争や国共内戦、金門・馬祖の戦役などで戦死した三十数万人であり、3月29日と9月3日には盛大な祭典が執り行なわれている。

現在は関連施設のすべてが建て替えられている。当然、日本統治時代の面影のようなものではなく、戦後の言論統制の時代、護国神社の存在は意図的に隠されてきた部分もあったため、遺構というべきものはないと思われてきた。しかし、敷地のはずれには、神社の石灯籠が忘れられたように残っている。

石灯籠は分解された形になっており、完全な状態ではない。しかし、胴部には「奉獻」の文字と「帝国在郷軍人会」の文字がはっきりと読み取れる。通常のものよりも大きなもので、堅固な印象の石塊が使用されている。

この石灯籠は正確には忠烈祠の敷地外にあり、通常、拝観客が目に見える場所にはない。管理人などに尋ねてみても、ここに石灯籠が残っていることを教えられることはない。しかし、石灯籠は確かに残っている。筆者もここに石灯籠が残っているとは思わず、まさに偶然というべき出会いだ。人目につかない場所であり、この場所に足を向けたことが自分でも不思議なくらいである。打ち捨てられた遺構が筆者を引きつけたのかもしれないとまで思ってしまう状況だった。

なお、台湾護国神社に奉納されていた神馬も現存している。これは連載第二回目でも記しているが、台北市二二八和平紀念公園の敷地内にある。説明書きや案内板などはないが、この神馬像の腹には護国神社の神紋が確認できる。さらに下腹には製作者の刻印も見える。そこには「祥雲作」という文字が残っている。これはコンクリート像作家として知られる浅野祥雲と思われるが、これは



今も残っている護国神社の石燈籠。完全な形ではないが、護国神社の遺構が残っているのは奇跡に近い。



台北 228 和平紀念公園内に移設されている護国神社の神馬像。ここにおかれるようになった経緯など、詳細は不明である。

推測の域を出ない。浅野が手がけた作品の数は多く、1000 を超えると言われるが、確かにその中に神馬も含まれている。しかし、そうだとしたら、どのような経緯で台湾との関わりが生まれたのか、それが謎である。今後の調査が待たれる。

(次号に続く)